ひと、くらし、みらいのために
厚生労働省
Ministry of Health, Labour and Welfare

あなたにできること、きっとある。

もっと知りたい、里親のこと

子どもを迎え入れるまでの4ステップ

STEP1 相談
児童相談所や里親支援機関に相談を。里親の条件や手続きなどを説明します。

STEP2 研修・家庭訪問
児童養護施設や乳児院などでの実習を含む数日間の研修と、家庭環境の調査があります。

STEP3 登録
都道府県等の審査を経て、里親として登録されます。

STEP4 交流
面会や数時間の外出、宿泊などで、子どもと一緒に過ごします。

子どもを家庭に迎え入れる

養育に必要な費用が支給されます

子どもを育てるために必要な生活費、教育費、医療費などが支給されるので、安心して養育できます。

里親手当 1人あたり 9万円／月
※養育里親の場合。

＋

生活費
- 乳児 約6万円／月
- 乳児以外 約5万2千円／月

※その他、養育費や医療費、防災対策費なども支給されます。

里親Q&A

Q 特別な資格が必要なの？
A 所定の研修を受け、子どもに適した住環境があるなどの要件を満たしていれば、特別な資格は必要ありません。保護を必要とする子どもに寄り添い、あたたかい愛情と正しい理解をもって接することができれば大丈夫です。

Q 共働きでも大丈夫？
A 基本的に問題ありません。ただし、子どもの養育に支障がでる場合は調整が必要なこともあります。

Q 実子がいても里親になれる？
A なれます。実の子どもに里親になることを伝え、理解を得たうえで、新しい家族を迎えるのが理想です。実の子どもの年齢や性別を考慮して、委託する子どもを決めることもあります。

里親制度について知りたい

朝日新聞デジタルサイト
「広げよう『里親』の輪」
https://globe.asahi.com/globe/extra/satooyanowa/index.html

厚生労働省 里親制度 ｜ 全国里親会 ｜ 日本ファミリーホーム協議会

里親になりたい

お近くの児童相談所にお問い合わせください。

児童相談所
［相談専用ダイヤル］0120-189-783（いちはやくおなやみを）

［インターネット］ 全国児童相談所一覧

あたたかい家庭を必要としている
子どもたちがいます

広げよう「里親」の輪

それぞれの事情で親と離れて暮らす子どもたち。
日本には約4万2千人います。
そうした子どもを自分の家庭に迎え入れ、
さまざまなサポートを
受けながら養育するのが「里親制度」です。

朝日新聞デジタルサイト
「広げよう『里親』の輪」
https://globe.asahi.com/globe/extra/satooyanowa/index.html

児童相談所［相談専用ダイヤル］
0120-189-783（いちはやくおなやみを）

ひと、くらし、みらいのために
厚生労働省
Ministry of Health, Labour and Welfare

「里親」STORY

日本には、さまざまな理由により親と暮らすことができない子どもたちが約4万2千人います。
子どもたちの心のケアと健やかな成長には、家庭に迎え入れられ、
自分が愛されていると実感できることが大切です。
子どもが置かれた状況に一つとして同じケースはないからこそ、里親にまつわる物語も十人十色です。

大勢の大人が大勢の子どもを育てる、そんな社会になれば

CASE 1

モデル　冨永 愛さん

　実は以前、私も里親になれないか、と考えていた時期があります。欧米のファッション業界で仕事をしていると、「血のつながらない子と暮らし始めた」という話を聞くことも少なくないんです。ですから、そのときは実行に移せなかったものの、私にとって、里親になることは身近で現実的なチョイスの一つでした。

　一方、日本では、仕事仲間との雑談の中で里親が話題になることは、まったくと言っていいほどありません。お父さんがいて、お母さんがいて、そして血縁のある子どもがいるというのが「正しい家族」であるという刷り込みがあるのでしょうね。家族にはいろいろなカタチがあり、その一つに、里親と子どもという家族があっても全然不思議はないのに、なんとなく話題にしにくい。いろいろな事情で親と一緒に生活できない子はたくさんいるのだから、そんな子たちを里親として育てていくことが、もっと普通のことになっていくといいのになあと思います。

　なぜなら、考えてみたら私たちは大昔からそうやって生きてきたんですよ。遠い昔の人たちは、集落を作り、血のつながらない人ともみんなで助け合いながら大らかに暮らしていたと言います。大勢の大人が大勢の子どもの面倒を自然に見ていたのだと思います。

　社会の変化によって「大昔の当たり前」をそのまま行うことが次第に難しくなってきましたが、そもそもの原点に思いを致してみれば、里親制度もそんなに特別なことではないような気がしています。ですから、誰もがもっと気軽にこの制度にアクセスするようになってほしいと思います。もちろん、子どもを育てることは大変で、生半可な気持ちでできることではありません。でも、情報へのアクセスくらいは気軽にできるといい。そうなれば、大人に見守られながら安心して育つことのできる子はきっと増えると思います。

　私自身を振り返っても、子どものころから、祖父母や親戚のおじさん、近所のおばさん、学校の先生など、たくさんの大人に助けてもらいながら成長してきました。息子を産んで母になり、その後シングルマザーになった私は、まわりの人たちに支えてもらいながらなんとか歩いてきました。

　たくさんの大人が、子どもだった私に、あるいは、私の息子にしっかり向き合って、持てるエネルギーと時間をいっぱい注ぎ込んでくれた。それはまぎれもなく愛情そのものだったと思います。血がつながっているかいないかなんて関係なかった。

　愛情を受けた人が、今度は誰かに愛情を注ぎ、それを受けた人がまた誰かに注ぐ。そんな循環が世の中を回していくといいですね。そのために自分にできることをやっていきたいなと思います。

とみなが・あい／ 17歳でNYコレクションにてモデルとしてデビューし、一躍話題となる。以後、世界の第一線でトップモデルとして活躍。テレビ、ラジオのパーソナリティ、俳優としても活躍。チャリティや社会貢献活動にも積極的に取り組んでいる。公益財団法人ジョイセフアンバサダー、エシカルライフスタイルSDGsアンバサダー（消費者庁）

「親」にならなくてもいい。でも子どものために「何か」はできる

CASE 2

養育里親（一般社団法人ぐるーん代表理事）　河本美津子さん

「無理なく、楽しく、できるだけ」

　これが、私が代表理事を務めている一般社団法人「ぐるーん」の合言葉です。ぐるーんでは、全国各地にいる「サポーター」が乳児院や児童養護施設を訪れ、子どもたちを「抱っこ」します。抱っこするのは、子どもに「あなたのことを見ているよ」ということを伝えるためです。だから、身体的な抱っこ以外にも、子どもを見て「目で抱っこ」、声をかけて「言葉で抱っこ」するという方法があります。一緒に遊ぶのもいいし、そばに座って宿題をしている様子を見守るだけでもいい。あなたができるやり方で、子どもの存在を「抱っこ」すればいいんです。

　ぐるーんは2011年、前代表の有尾美香子が神奈川県で設立しました。2022年現在、47都道府県で10代～ 80代の男女、4000人以上のサポーターが登録しています。私が参加したのは2012年から。3人の実子が巣立ち、「里親のようにフルに関わることはできないけれど、施設で暮らす子どもたちのために何かできないか」と考えていました。そんな時にぐるーんの活動を知り、「これだ!」と思ったんです。抱っこに行ったサポーターは皆、言います。「抱っこを『してあげている』んじゃない、私たちが抱っこを『してもらっている』感覚になるんだ」と。

　ぐるーんの活動を通して里親にも関心を持ち、登録しました。季節・週末里親となり、高校2年の男の子が週末や長期休暇にうちに来るようになりました。大好きな熱々のグラタンをほおばりながら、「幸せ～」と言ったときの笑顔は忘れられません。その子が高校卒業後に就職してから2年間一緒に暮らしましたが、毎日仕事に行っても何かにつけ「辞めたい」って言うんですね。その子は育ってきた環境の中で働く大人をほとんど見たことがありませんでした。子どもにとって、将来自分の家庭を築く際のモデルに触れる、知るということは必要なことだと感じました。それから季節・週末里親として数人の養育にかかわり、現在は養育里親として17歳の男の子と夫、犬と一緒に生活しています。

　季節・週末里親なら、親類の子どもが遊びに来る感覚で子どもたちと関わることができますし、また1人の子どもに対して何人いてもいいと思います。親代わりではなくて、いろいろな距離感のおじさんやおばさん、おじいちゃんやおばあちゃんということですね。

　実子でも里親としてお預かりする子どもでも、保護者だけで育てるのは大変です。里親にならなくても、子どもたちのためにあなたができることはきっとあります。子どもと直接触れ合わなくても、子どもに送るスタイ（よだれかけ）を作ることはできるし、その人を応援することもできます。あなたができることを一緒に考えて、見つけていきましょう。

こうもと・みつこ／ 1957年、岡山県生まれ。一般社団法人ぐるーん代表理事。2012年に岡山で初めてぐるーんのサポーターに登録し、前代表の有尾美香子さんが亡くなったことから、2015年に代表を引き継いだ。成人した実子が3人いて、河本さん夫妻と実子夫妻で生活していたときに里親として子どもを預かり、一時は５人で暮らしたことも。以前に里親として関わった子どもとは現在も交流が続いている。

背伸びしなくてもいいんです

CASE 3

俳優　佐藤浩市さん

　施設で暮らす子どもを週末や休み期間に預かる「フレンドホーム」（東京都の制度の名称）の活動を始めて4年半になります。きっかけは、妻に「こういう制度があるのだけど、わが家も参加してみない？」と誘われたことでした。

　背伸びをしすぎて足元が見えなくなるようでは困るけれど、自分たちができる範囲でやるのならいいんじゃないか――。そんなふうに感じ、妻に「やってみようか」と返事をしたのです。

　子どもたちを家に迎えるなかで僕が行き着いたのは、「特別扱いはしない」ということでした。積極的に話しかけてかまってあげなきゃとか、あちこちへ遊びに連れて行かないと、など自らハードルを上げることはするまいと。こちらが身構えていたら、子どもたちだって気を使うでしょう？

　とはいえ、ただ放っておくのも違うので、僕のスタンスとしては「言うべきとき、質問されたときに必要な言葉をかける」ということでいいんじゃないかと。もちろんそれだって簡単ではないですが、あとはもう経験のなかでつかんでいくしかない、と割り切ることにしました。以前にある女の子が髪を切ったとき、「似合うね」と何げなく言葉をかけたときの彼女のうれしそうな顔が、「本当」の笑顔だったんですよ。「ああ良かった、こういうことを紡いでいければ」と思いました。

　「フレンドホーム」では、預かる子どもたちと食事をしたり、子どもたちが家に泊まりに来たりもします。1人暮らしをしている息子（俳優の寛一郎さん）や息子の友達も交えてご飯を食べ、進路について話し合ったこともありましたね。至って普通のことしかしていませんが、その「普通」が特別なのだという子もいるのです。

　映画の撮影現場に、子どもたちを連れて行くこともあります。昔はよく息子を連れて行きましたし、僕自身も子どものころ、親（俳優の故・三國連太郎さん）に連れて行ってもらいました。実際にものづくりの現場を見て、「素敵だな」でもいいし「仕事するって大変なんだな」でもいいから、何かを感じとってもらえたらと思って。もしかしたらそのなかで、将来役者を志す子が出てくるかもしれませんしね。

　「里親」については正直、僕も言葉自体や責任への重さから身構えていたところがありました。そんななかで、里親でなくても例えば「フレンドホーム」のような関わり方のスタイルも取れるということがわかったんです。里親というと必ず養子縁組をしなければいけないと間違ってとらえているケースもありますし、僕もそうだったように、週末や休み期間に預かることもできる、ということすら知らない人もたくさんいます。「里親」という言葉の響きは重いんだけれども、入り口として「軽く」したほうがいい。その相反するものを縮めていくためには、やはりできるだけ多くの人が参加して、周りに伝えていくことが必要だと思うんです。まずは「フレンドホーム」を検索して調べてもらうところから始めるのでもいい。今回、僕がこうしてお話しすることで、少しでも興味を持っていただけたら、そして自分にも何かできることはないかと考えていただけたら、とてもうれしく思います。

さとう・こういち／ 1960年、東京都生まれ。19歳で俳優としてデビューして以来、日本アカデミー賞最優秀主演男優賞をはじめ数多くの賞を受賞。日本を代表する名優としてテレビ、映画などで活躍している。

里親が育てる。
社会が支える。

フォスタリングマークは、
里親普及のためのシンボルマークです。

フォスタリングマークについて

里親制度を広めるとともに、里親家庭を社会で支えるための支援の輪が広がることを願って作られたシンボルマークです。

特設サイト公開中！

朝日新聞デジタルサイト **広げよう「里親」の輪**

https://globe.asahi.com/globe/extra/satooyanowa/index.html